倉吉市文化財調査報告書　第118集

下前田遺跡発掘調査報告書

平成14年度

倉吉市教育委員会

例　　言

1　本報告書は、市道社小学校線道路改良事業に伴い、倉吉市教育委員会が、鳥取県倉吉市国分寺字下前田（しもまえだ）・雑シ畑（ざつしばた）において実施した、埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2　調査体制は次のような組織・編制である。

調査主体　倉吉市教育委員会

事務局　倉吉市教育委員会文化課

八田洋太郎（教育長　14年３月まで）　福光　純一（教育長　14年６月から）
景山　　敏（教育次長）　眞田　廣幸（文化課長）
藤井　　晃（文化課課長補佐兼文化財係長　13年度）　佐々木英則（文化課課長補佐兼文化財係長　14年度）
藤井　敬子（文化財係主任）　森下　哲哉（文化財係主任）
根鈴智津子（文化財係主任）　加藤　誠司（文化財係主事）
岡本　智則（文化財係主事　13年度）　山崎　昌子（文化財係主事）
岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子（13年度）

内務補助員　金田　朋子（13年度）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・山本　錦・前坂　英樹・湯浅　博・明里　千秋（13年度）
松嶋あつ子・竹歳　暁子（13・14年度）
遠藤　美佳・大川　京子・大西　利恵・関　美幸・田口小代子・戸田めぐみ・村垣みゆき・森木　恵子（14年度）

3　現地調査は岡平が担当した。本書の執筆は調査員が討議し、岡平が行った。

4　第２図（地形図）は、国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆した。

5　挿図中の方位は国土座標第Ⅴ座標系の北を指す。

6　遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一した。

7　調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 3
　1　遺構 …… 5
　　A地区下層検出の遺構 …… 5
　　A地区上層検出の遺構 …… 6
　　B地区検出の遺構 …… 9
　　C地区検出の遺構 …… 9
　2　遺物 …… 10
Ⅳ　まとめ …… 13
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　下前田遺跡調査区位置図 …… 1
第2図　周辺の地形と遺跡分布図 …… 2
第3図　下前田遺跡遺構全体図 …… 3
第4図　A地区全体図 …… 4
第5図　A地区遺構断面図 …… 5
第6図　1・2・4・6号土壙遺構図 …… 5
第7図　1号段状遺構遺構図 …… 6
第8図　1号箱式石棺墓遺構図 …… 7
第9図　B地区全体図 …… 8
第10図　B地区遺構断面図 …… 8
第11図　9号土壙遺構図 …… 9
第12図　C地区全体図 …… 9
第13図　出土遺物図1 …… 11
第14図　出土遺物図2 …… 13

図　版　目　次

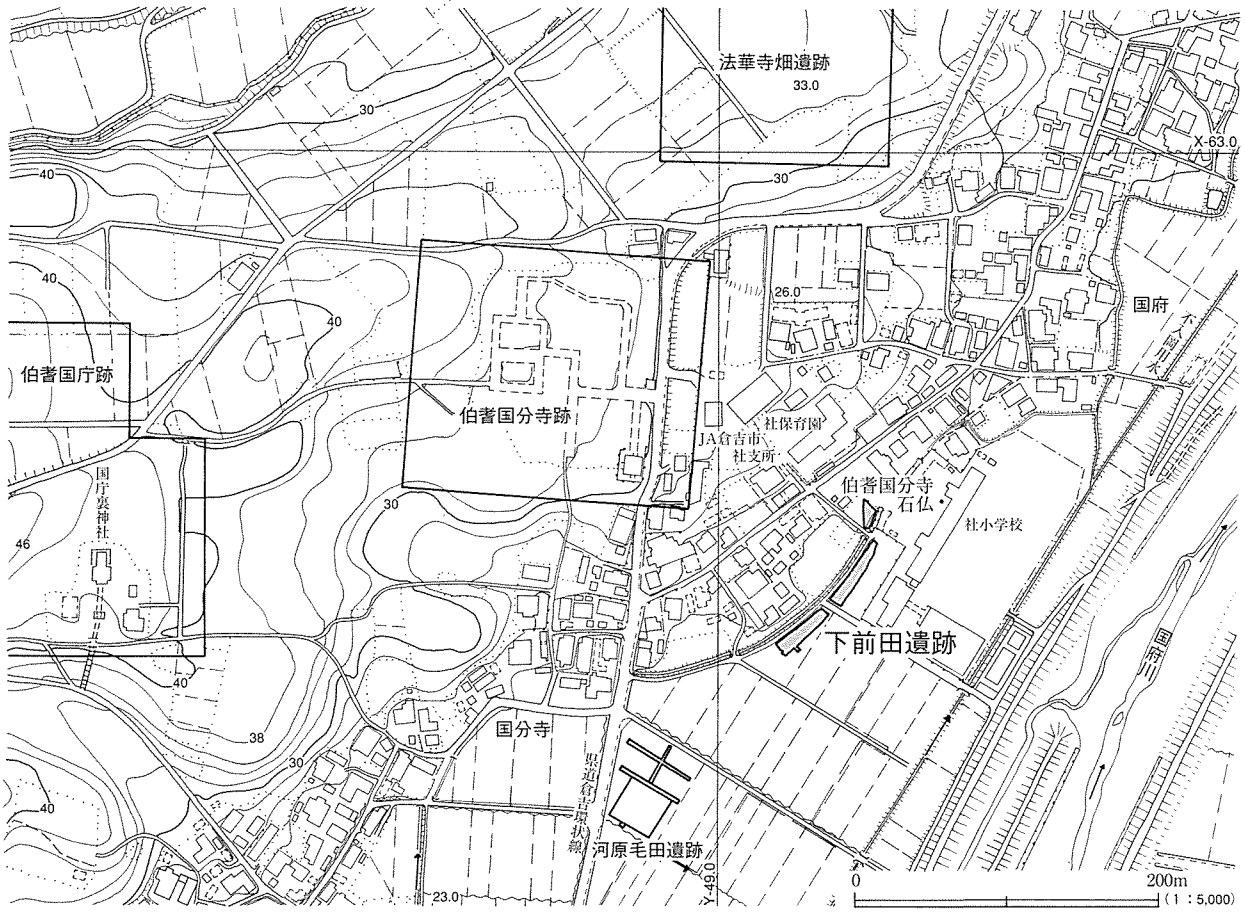
図版1　遺構　A地区下層　A地区上層　1号箱式石棺墓　蓋石検出状況　棺床面　完掘状況　1号土壙
　　2号土壙　2号土壙断面
図版2　遺構　B地区全景　C地区全景　9号土壙
図版3　遺物

Ⅰ　発掘調査に至る経過

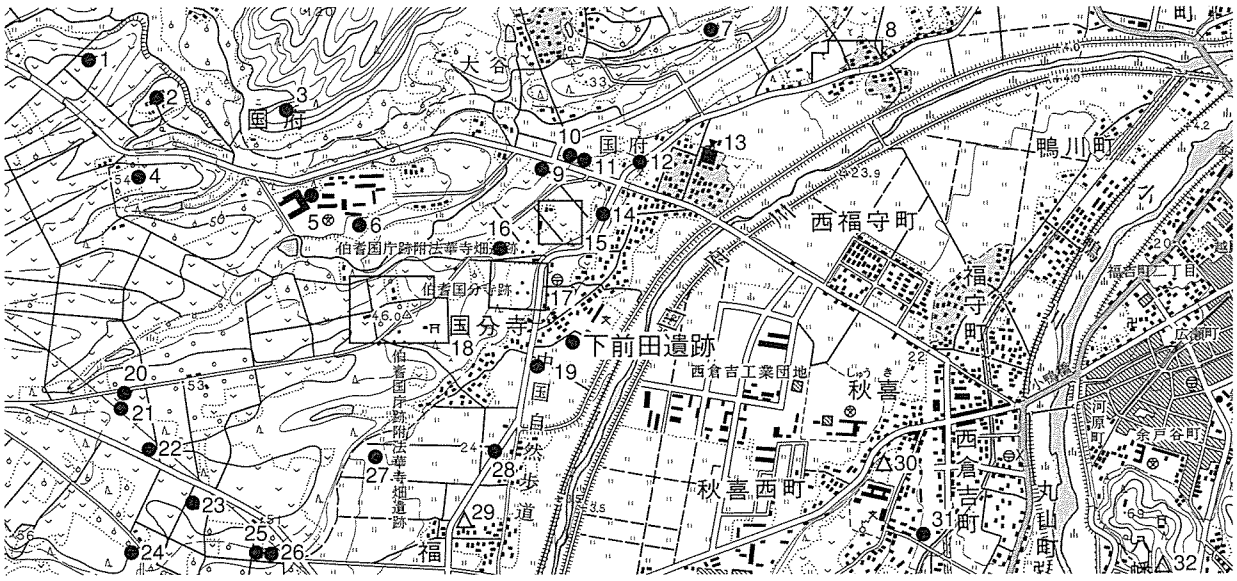
平成12年11月、倉吉市建設部建設課から市道社小学校線改良工事に伴い、埋蔵文化財の有無について照会があった。計画は、現国分寺集落の南東端を沿うように延びる農道を幅３mから幅12mに拡幅するものである。計画地は史跡伯耆国分寺跡から南東に約100m、伯耆国分寺跡などが所在する丘陵とその南東に広がる平野部との傾斜変換点にあたり、現況は水田と畑であった。市教育委員会文化課で現地を踏査した結果、計画地およびその周辺に遺物散布が認められたため、試掘・確認調査の必要があると回答した。

平成13年５月から国・県の補助を受け試掘・確認調査を開始した。一部のトレンチからは多量に遺物が出土し遺跡の存在は想定されるものの、周辺の水田耕作と調査時期が重なったため各トレンチから湧水が激しく、遺構の有無、遺跡範囲の確認は不可能な状況であった。そのため、水田耕作が終了する秋から追加調査を行い判断する事にした。平成13年11月から実施した追加調査では、溝と考えられる落ち込みを確認し、遺跡の存在が明らかになった。遺物の出土状況などから、開発範囲の約北半分が遺跡の範囲に含まれると判断された。

建設課との協議の結果、道路法線・工法は変更不可能であり、周辺住民の早期着工の要望もあったため試掘調査に引き続き発掘調査を実施することとした。調査は倉吉市教育委員会文化課が主体となり、平成13年11月12日から平成14年１月９日まで実施した。調査面積は850㎡であった。平成13年度は現地調査のみを実施し、整理作業・報告書作成は平成14年度に行った。



第１図　下前田遺跡調査区位置図



第２図　周辺の地形と遺跡分布図

1	遠藤谷峯遺跡	8	不入岡遺跡	15	法華寺畑遺跡	22	東福田寺遺跡	29	今倉城跡
2	白市遺跡	9	伯耆国府関連遺跡１次	16	国分寺北遺跡	23	岩屋遺跡	30	北ノ城跡
3	大谷後ロ谷墳丘墓	10	古神宮古墓	17	伯耆国分寺跡	24	福田寺遺跡２次	31	空岡田遺跡
4	中峯遺跡	11	打塚遺跡	18	伯耆国庁跡	25	矢戸遺跡２次	32	四十二丸城跡
5	向野遺跡１次	12	擲塚遺跡	19	河原毛田遺跡	26	矢戸遺跡１次		
6	向野遺跡２次	13	国分寺古墳	20	福田寺遺跡１次	27	嶋ノ掛遺跡		
7	中尾遺跡	14	宮ノ下遺跡	21	福田寺遺跡３次	28	今倉遺跡		

Ⅱ　位置と歴史的環境

下前田遺跡は、倉吉市街地から西へ約３km、倉吉市国分寺字下前田・雑シ畑に所在する。倉吉市の西を流れる国府川左岸の平野部から、その西に広がる通称久米ヶ原丘陵の端部に立地する。当遺跡の周辺は数多くの遺跡が知られ、部分的なものも含め発掘調査が行われた遺跡も多い。以下、第２図を中心に周辺の様相を述べる。

旧石器時代では中尾遺跡（７）でナイフ型石器などが出土しているが遺構はまだ未検出である。縄文時代には丘陵上を中心に落し穴が検出された遺跡が増えている。中でも中尾遺跡では84基もの落し穴が検出されている。また、微高地上に位置する河原毛田遺跡（19）でも落し穴が検出されている。弥生時代、前期の遺構は中尾遺跡で屋内貯蔵穴をもつ平地式住居と、竪穴式住居が１棟ずつ、イキス遺跡で土壙墓群が検出されている。中期になると、中峯遺跡（４）・福田寺遺跡１次・３次（20・21）など丘陵部を中心に集落が営まれるようになる。後期になるとさらに集落の数は増加し遠藤谷峯遺跡（１）・白市遺跡（２）などがある。また、四王寺山山麓には大谷後ロ谷墳丘墓（３）・三度舞墳丘墓・柴栗墳丘墓などの墳丘墓がつくられる。古墳時代の集落は中峯遺跡・宮ノ下遺跡（14）・擲塚遺跡（12）など丘陵上で知られている。前期の首長墳では国府川左岸の微高地上に東伯耆地方で最古級の首長墳といわれる国分寺古墳（13・前方後方？墳60m）がつくられる。その後は琴柱形石製品や鍬形石などが出土した上神大将塚古墳（円墳30m）・大谷大将塚古墳（前方後円墳50m）などが知られるものの、大形の前方後円墳が継続してつくられることはない。また前期の小規模な方墳が宮ノ下遺跡で確認されている。古墳時代後期には四王寺山裾部や久米ヶ原丘陵上に古墳群がつくられる。

奈良時代には、当遺跡の北西の久米ヶ原丘陵末端部に伯耆国庁跡（18）・伯耆国分寺跡（17）・国分尼寺跡に転用されたと推定される法華寺畑遺跡（15）が近接して置かれる。また、当遺跡の北西約1.5kmには国庁に付属す

る官衙跡と考えられる不入岡遺跡（８）が存在する。北に位置する四王寺山（標高171m）山頂には新羅海賊調伏のため建立された四王寺跡が所在し、奈良・平安時代伯耆国の政治・文化の中心となる。当遺跡の南西約150mの位置にある河原毛田遺跡では東西方向に延びる平行する溝が確認されている。溝間の心々距離は15mで、西側に延長すると国庁南側を通り、古代山陰道の可能性が考えられている。この時期の集落は国分寺北遺跡（16）・向野遺跡（５・６）・擲塚遺跡・嶋ノ掛遺跡（27）・矢戸遺跡（25・26）などが知られている。国分寺北遺跡は規格性のある建物配置と区画溝からなり国庁に関連する施設の可能性がある。向野遺跡では９世紀後半まで竪穴式住居が営まれている事が確認されている。この時期の墳墓は調査例がほとんど無いため明らかでないが、倉吉市北側の向山丘陵上に立地する長谷遺跡で横穴式石室を模した石槨内に土師器蔵骨器２個を合葬した火葬墓が調査されている。

宮ノ下遺跡・擲塚遺跡では11～13世紀の遺物が出土しているが、遺構としてはピット群・土壙が主である。打塚遺跡（11）では12世紀の墳丘を持つ墳墓が発掘調査されている。今倉遺跡（28）では14～16世紀の掘立柱建物群が検出されている。

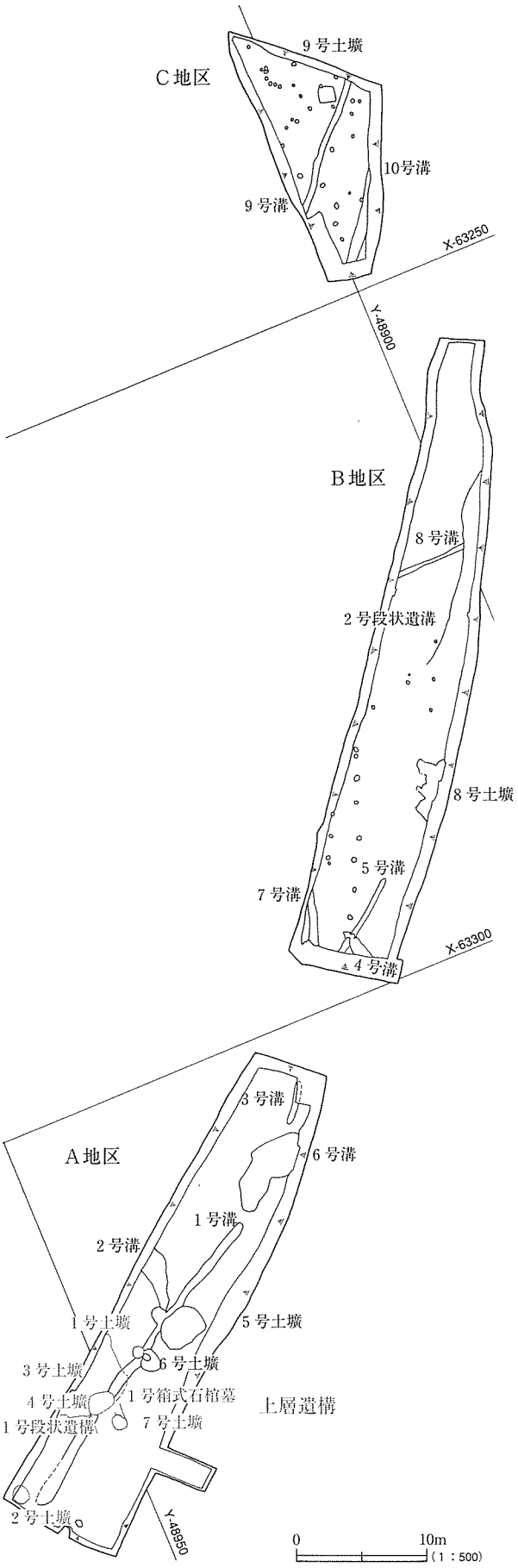
Ⅲ　調査の概要

現在使用している農道が発掘調査範囲を２ケ所で横断していたため、調査区を３つに分け、南西からＡ地区・Ｂ地区・Ｃ地区と呼ぶことにした。

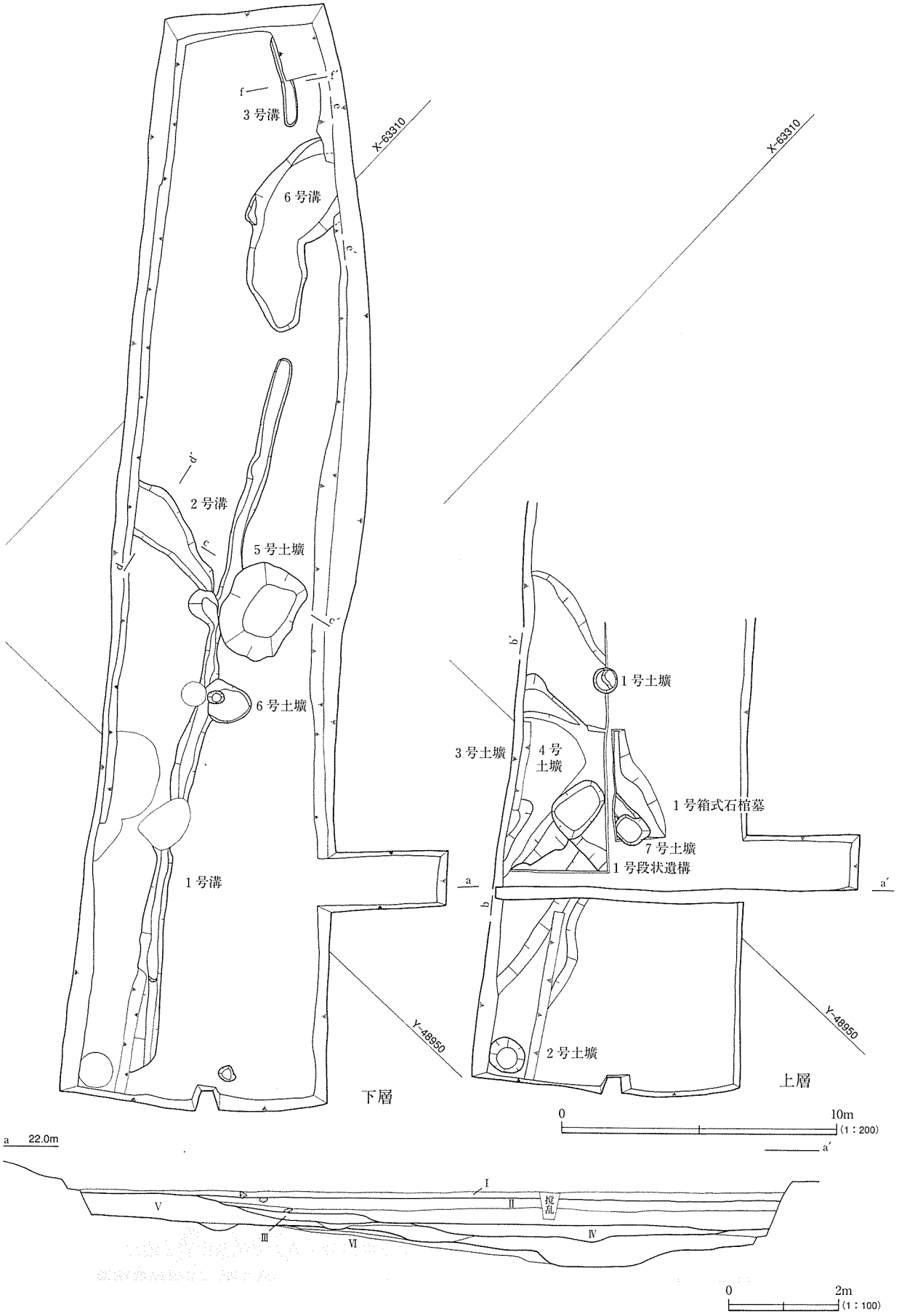
調査区内の基本的層序は、Ａ地区からＣ地区にかけて沖積地から丘陵末端へ地形が変化するのを反映して各地区で異なる。Ａ地区では（第４図参照）上から水田耕作土・Ⅰ褐黒色土・Ⅱ灰黒色土・Ⅳ黒灰色砂・Ⅴ黒色土・Ⅵ黒灰色土および灰白色粘質土である。Ⅲ灰黒色土は１号段状遺構埋土である。厳密ではないがⅠ層は近現代の遺物を含みⅡ層は古墳時代から中世の遺物を含む。Ⅳ層は主に下層に平安時代の遺物を含む。Ⅴ層はＡ地区の南西側にのみ存在し、その南側はⅣ層により浸蝕されている。Ⅳ層はＡ地区南側調査区際に細長く存在し、平安時代以降国府川の氾濫により堆積したものと考えられる。Ⅵ層は無遺物層である。Ⅴ層の上面（Ａ地区上層）とその下のⅥ層上面（Ａ地区下層）で遺構検出を行った。

Ｂ地区にはⅤ層がなく、遺構検出はⅥ層上面で行った。

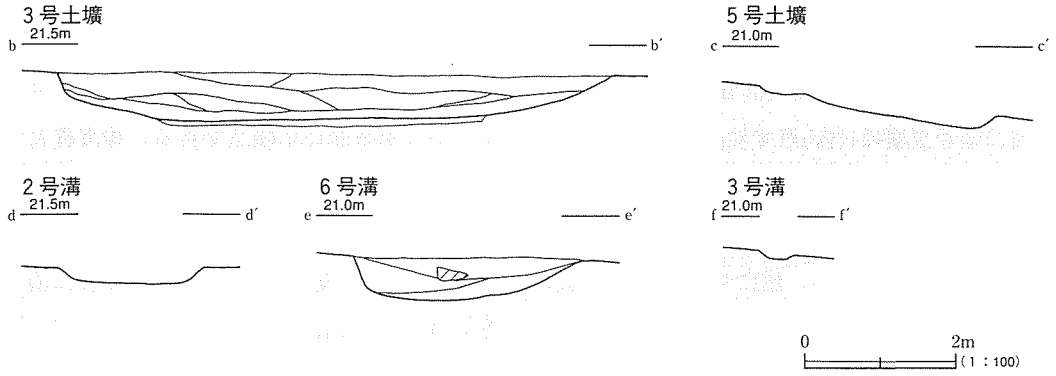
Ｃ地区は、現耕作土下に厚さ0.4～１mの黒色土（クロボク）が存在し、遺構検出はその下の暗褐色土及びホーキ層上面で行った。



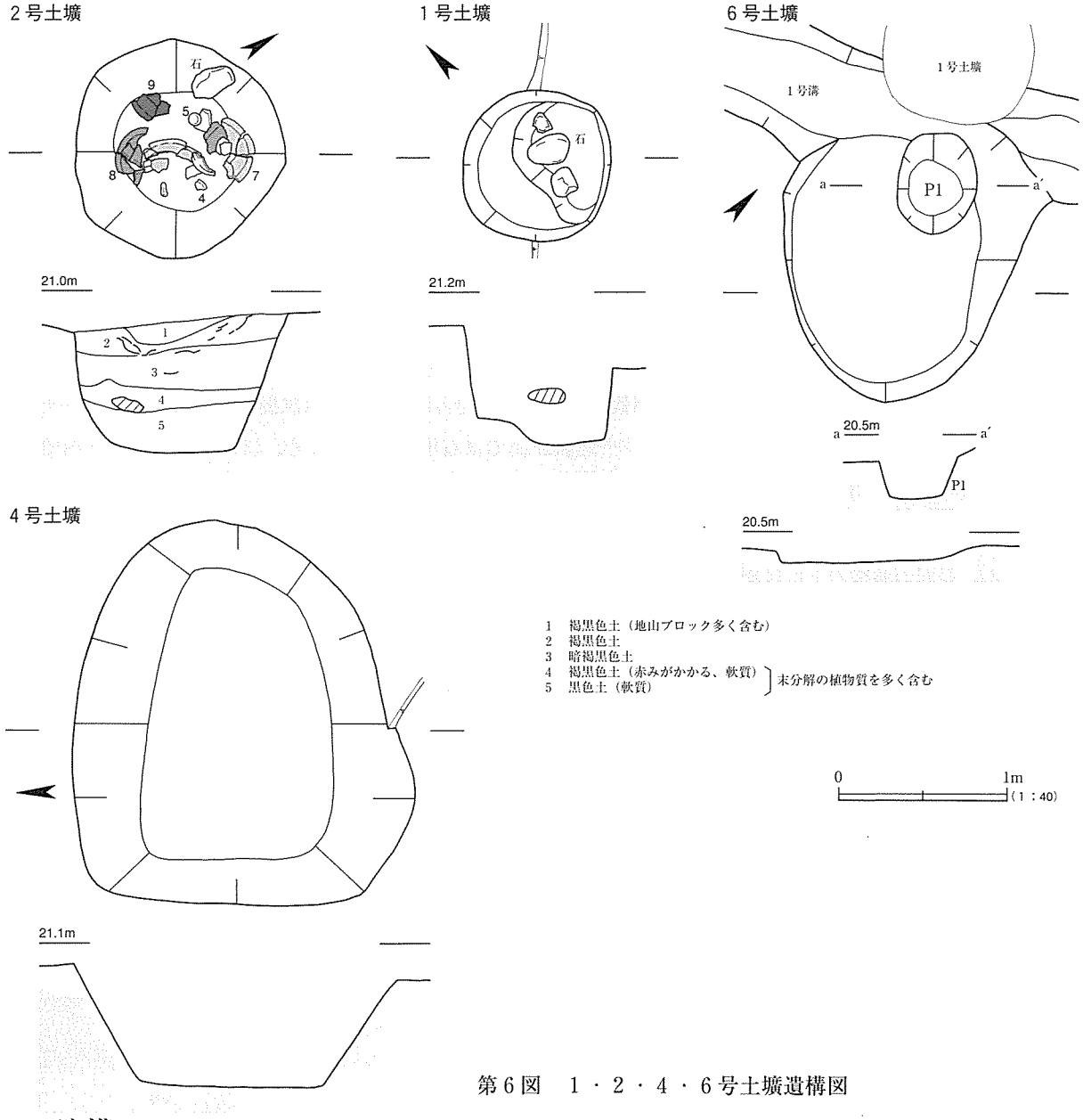
第３図　下前田遺跡遺構全体図


3 号溝
6 号溝
2 号溝
5 号土壙
6 号土壙
1 号溝
X-63310
Y-48950
下層
1 号土壙
3 号土壙
4 号
土壙
1 号箱式石棺墓
7 号土壙
1 号段状遺構
2 号土壙
上層
0
10m
(1：200)
a 22.0m
I
II
V
III
VI
IV
撹乱
0
2m
(1：100)

第 4 図　A 地区全体図



第5図
A地区遺構断面図



第6図　1・2・4・6号土壙遺構図

1．遺構

調査により確認した遺構を調査区ごとに述べる。各地区とも湧水が激しく、毎日冠水するような状況であったため、断面の観察が行えなかったものも多々あり、遺構の切り合い、埋土の状況など明らかでないものも多い。

A地区下層検出の遺構

5号土壙　A地区中央で検出。不整な隅丸長方形の土壙で東西3.5m、南北2.7m、深さは0.3～0.5m。底面は平

らだが南が低い。土師器・須恵器・軒平瓦（国分寺分類651型式）が出土している。

6号土壙　A地区中央、5号土壙の1.2m西で検出。1号溝・P1と切り合うが新旧は未確認である。等高線に直交する向きに長軸をとる楕円形で、長軸1.6m、短軸は1.2m、深さは0.1m。遺物は出土していない。

1号溝　A地区南西端から北東方向にほぼ直線的に延びる。4号土壙・5号土壙・6号土壙・2号溝と切り合う。検出面の違いから4号土壙の方が新しい。他については未確認である。方位はN—58°—Eで、ほぼ等高線に沿う。長さは26.7m、幅は0.5m、深さは0.1m。南西がわずかに高く、端々のレベル差は北側上端で0.1m、底面で0.2m。遺物は出土していない。

2号溝　A地区の中央で検出。南端は1号溝と切り合い、北は調査区外に延びる。方位はN—6°—E。長さ4.1mを確認。幅は2.0～0.8m、深さは0.1～0.2m。北側が高く、底面のレベル差は0.1m。遺物は出土していない。

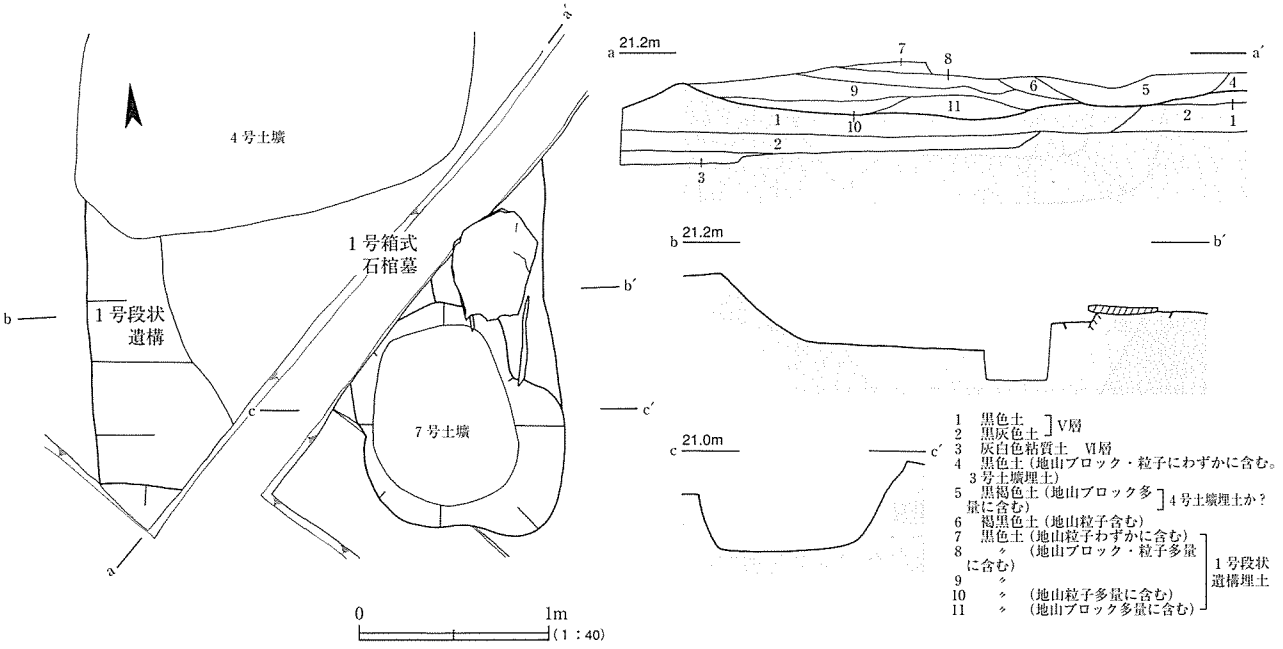
3号溝　A地区の北東端で検出。北に緩やかに曲がる。長さ3.3mを確認したが、調査区際断面にわずかに痕跡がみられ、調査区外に延びると考えられる。方位はN—58°—E。幅は0.5m、深さは0.1m。底面はわずかに北東が高い。

6号溝　A地区北東で検出。東北東から東に曲がり調査区外に延びる。長さ6.5mを確認した。幅は2.2～3.0m。折れ曲がる部分で底面に段差を持ち、浅い西側は深さ0.2～0.3m、東側で0.5m。溝内から図化した21・22の他、弥生土器・土師器・須恵器・瓦が出土している。

A地区上層検出の遺構

1号箱式石棺墓　A地区の南側で検出した。南側は7号土壙に切られる。北側は試掘調査時のサブトレンチのため未確認で、長さ1.5mを確認した。サブトレンチ北側断面では石棺掘り方はなく、ほぼサブトレンチ内で北端となると考えられる。方位はN—5°—E。掘り方の幅は0.58m。東側のみ2段掘りになる。棺の内法は幅0.26m。棺には板石を用い、蓋は1枚、側壁東側は3枚、西側は1枚が残る。後世の攪乱のため両側の側壁とも東に傾いている。西側の側壁の下にはやや丸みをおびた石がかませてある。深さ0.15～0.25mで南側が低いが、棺内には赤色塗彩のある平安時代土師器片を含む土が流入しており、床面もある程度失われていると考えられる。

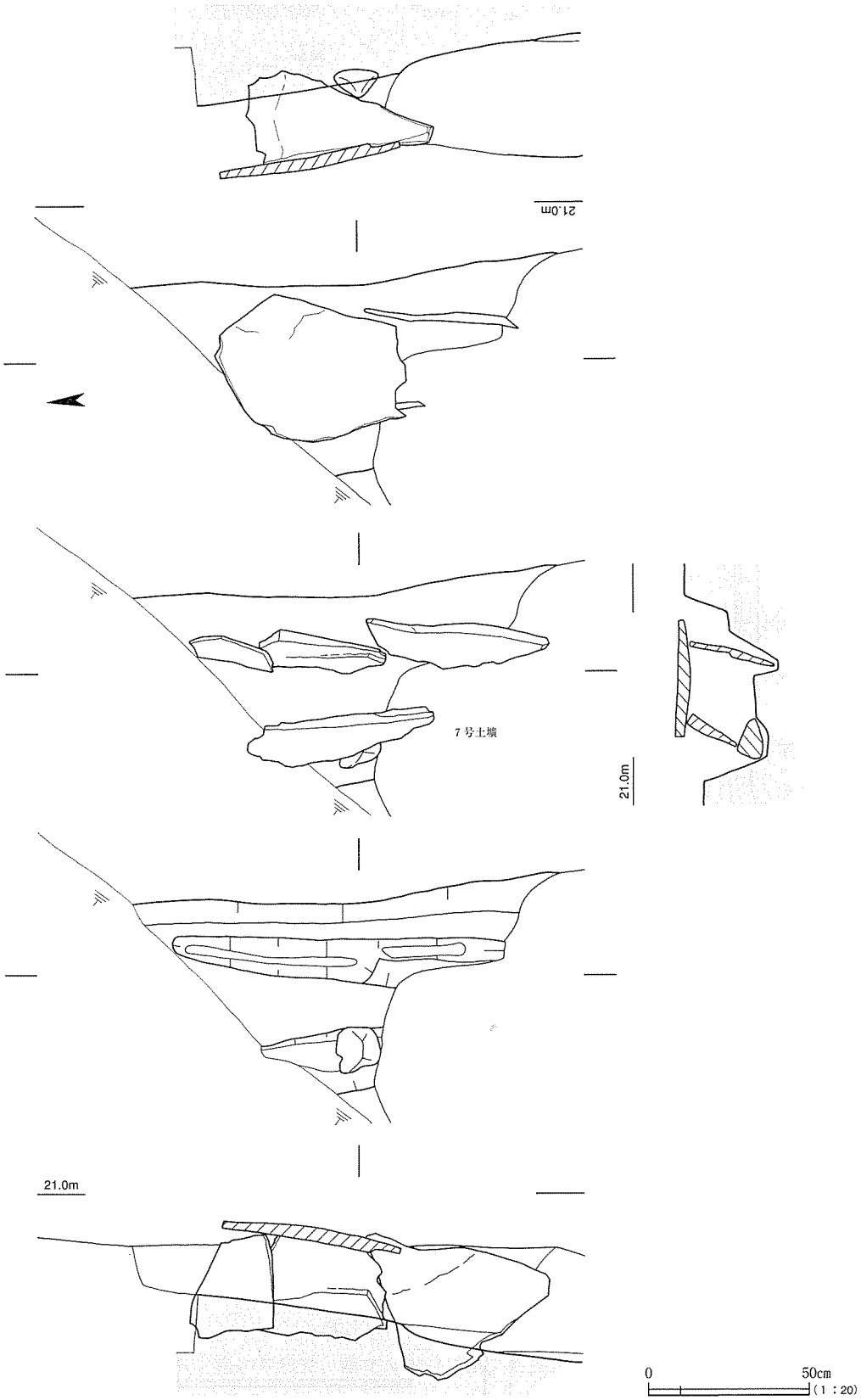
1号段状遺構　1号箱式石棺墓から2.0m西に位置する。北は3号・4号土壙に切られる。南は後世に斜面となり、長さ1.5m確認している。ほぼ南北の方位をとる。サブトレンチ断面図（第7図）の7～11層が埋土と考え



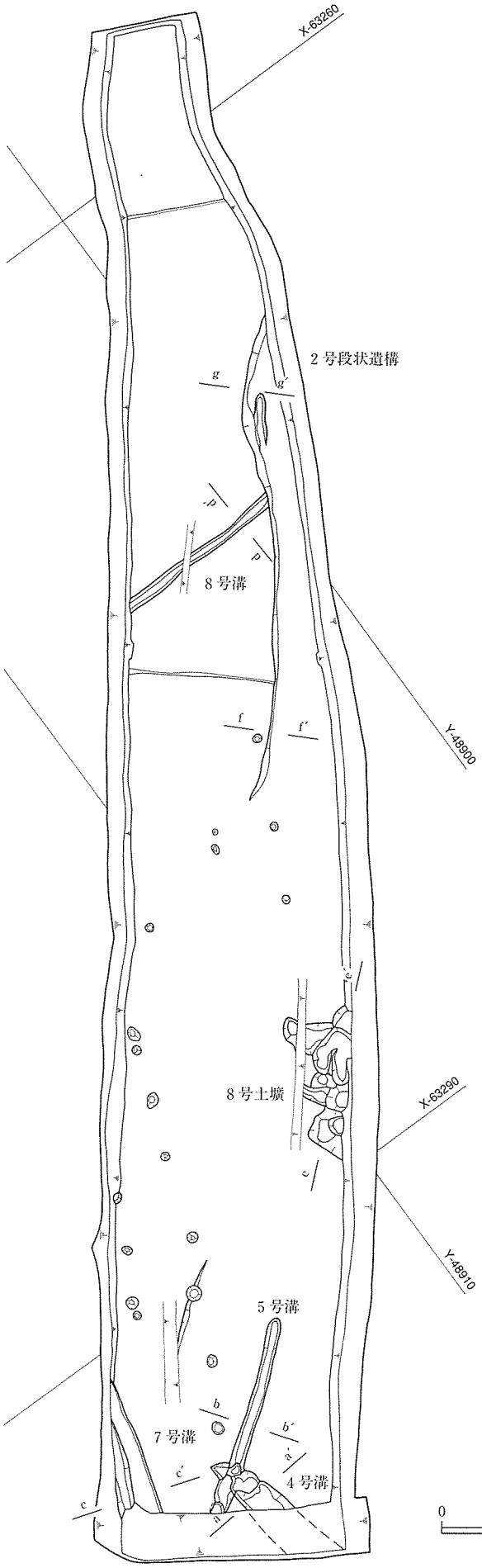
第7図　1号段状遺構遺構図

られる。段の上下で0.36mの差がある。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器長頸壷などが出土している。

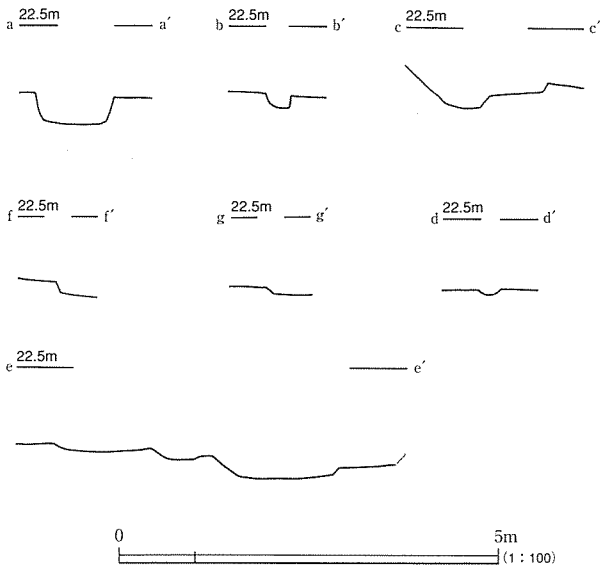
1号土壙　上層検出面のなかではもっとも東に位置する。かなり丸みのある隅丸方形で1辺0.9m。底面は東側が一段低く0.5m～0.7m。底面から0.3m上で河原石が3個出土した。埋土から瓦質土器鍋1・土師器鍋2・紡



第8図　1号箱式石棺墓遺構図



第9図　B地区全体図



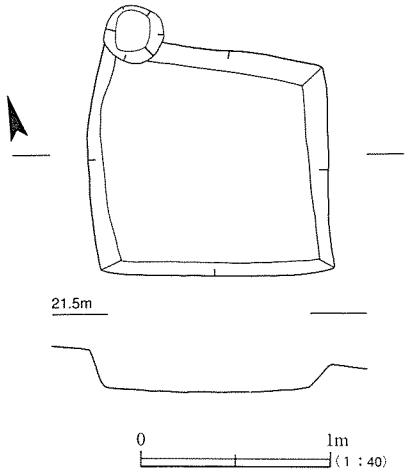
第10図　B地区遺構断面図

錘車3が出土している。

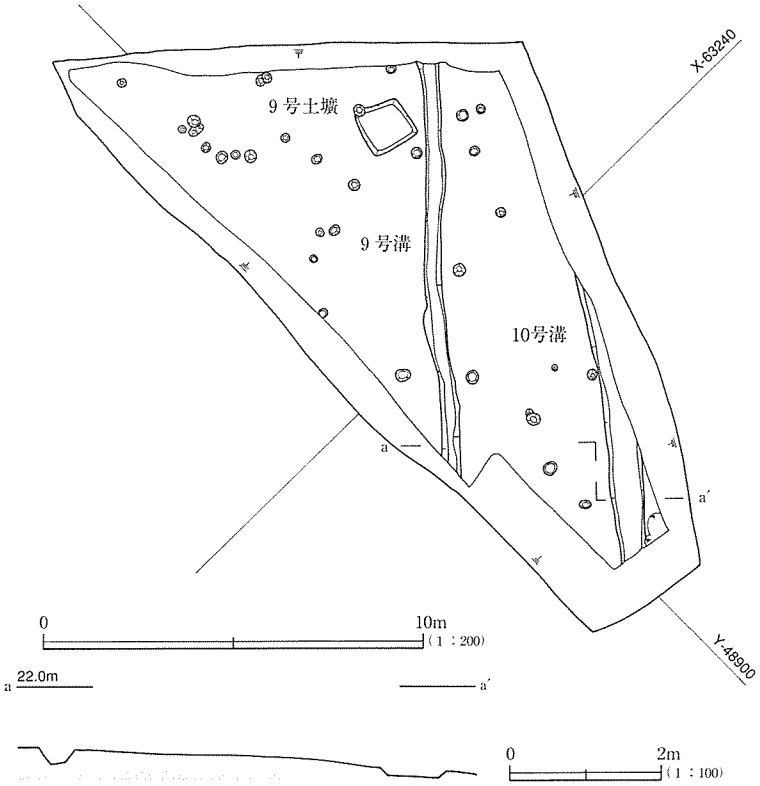
2号土壙　A地区の南西端で検出。やや南北に長い円形で、直径は約1.3m。深さは0.8mで底面は平らである。埋土は大きく上下に分かれ、上層（第6図1～3層）は比較的しまっており多くの遺物を含む。下層は（4・5層）は軟弱で未分解の植物質を多く含む。下層は開口時の堆積土で、上層は埋め土と考えられ、ある程度の期間開口したままであったことが推察される。調査時にも底面から湧水があり、井戸の可能性が高い。上層の出土遺物は図化した土師器皿4・5・6、鍋7・8・9のほか、小片だが土師器鍋2固体、磨り石がある。これらはほぼ同一層位で出土し、土壙廃絶後の一括廃棄遺物と考えられる。

3号土壙　A地区の南1/3程で検出。4号土壙に切られる。サブトレンチなどで不確かだが、方位をほぼ東西南北にとる巨大な方形の土壙と考えられる。今回の調査では南北約5m、東西約6mを確認した。深さは0.6m。遺物は下層から土師器坏11、埦13が、上層から土師器坏10・12、甕14が出土している。その他上下層とも弥生土器・土師器・須恵器・瓦が出土している。

4号土壙　3号土壙の南端に位置する。3号土壙・1号段状遺構を切る。歪な隅丸長方形で、東西2.3m、南北2.0m、深さ0.7m。中世の土師器鍋、須恵器甕などの小片が出土した。



第11図　9号土壙遺構図



第12図　C地区全体図

7号土壙　1号箱式石棺墓の南側を切る。サブトレンチなどで不確かだが、ほぼ南北に軸をもつ楕円形で南北1.2m、東西1.1m、深さ0.5m。弥生土器小片が出土している。

B地区検出の遺構

8号土壙　B地区の南1/3の位置で検出。南東側は調査区外へ延びる。検出した幅は北東～南西で5.0m。北西から調査区際に向けて深くなり、深さは0.2～0.4m。検出プラン、底面の形状から長軸0.8～1m程度の楕円形の土壙が接し合い形成されている。その小土壙は南北に連なるように観察され、小土壙が連なる4条の溝が重なっているとも考えられる。古墳時代から平安時代の土師器が出土している。

4号溝　B地区の南端で検出。検出面の観察では5号溝を切る。方位はN—58°—W。南は調査区外に延びる。今回の調査では溝北端部5.0mを確認した。南へいくにしたがい幅広く、深くなる。5号溝と切り合うあたりで幅0.9m、深さ0.2m。4号溝も直径0.5～0.6mの土壙が接し合い溝を形成している。出土遺物はない。

5号溝　B地区南端で検出。4号溝に切られる。方位はN—53°—Eで、西は調査区外へ延びる。今回の調査では長さ6.6mを確認。幅は0.4～0.6m、深さは南西に向けやや低くなり、0.1～0.2m。南西際で0.1mほど深くなる部分がある。出土遺物はない。

7号溝　B地区西端で検出。大半が調査区外になる。方位はN—19°—Eで、ほぼ同じ方向で2条が重なる。東側半分が古く、西側が深く新しい。幅は新段階が約0.6m、深さは、東側が0.2m、西側が0.6m。出土遺物はない。

8号溝　B地区の北1/3の位置で検出。西側は調査区外に延び、東側は2号段状遺構に切られる。今回の調査では5.6mを確認。方位はN—89°—E。幅は0.3～0.4m、深さは0.1m。出土遺物はない。

2号段状遺構　B地区の北東で検出。8号溝を切る。比高差0.1～0.2mの段がやや蛇行しながら15.5m続く。北東側はさらに調査区外に延びる。調査区際の北東へ曲がる部分に深さ数cmの溝が段の下端に沿って延びる。遺構に伴っての出土遺物はない。

C地区検出の遺構

9号土壙　C地区中央で検出。東辺が若干短い方形で、南北1.1～1.2m、東西1.2m。底面は平らで、深さは0.2m。埋土は地山ブロック混じりの黒色土で、土師器坏19・20が出土している。

9・10号溝　C地区の東側で検出。両者とも調査区外へ延びる。方向は9号溝がN—41°—E、10号溝がN—38°—Eである。両者とも断面形は逆台形で、深さは9号溝が0.3m、10号溝が0.1～0.2m。方向が4°違うものの、10号溝はほとんどが調査区外で、正確な数値とはいい難く、2条の平行した溝と考える事もできる。間隔は心々4.3m。道路側溝の可能性もあるが、溝間で硬化面等は確認できなかった。9号溝から土師器高台付坏23のほか土師器坏（糸切り底のものも含む）・甕、須恵器甕が出土している。

2．遺物

今回の発掘調査では試掘調査分も含め合計26コンテナの遺物が出土した。弥生土器、古墳時代から中世にいたる土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、鞴羽口、塼、磚、石製品などがある。これらの内の大半が包含層出土のもので、主に遺構出土のものを図化した。

1号土壙　**瓦質土器鍋**（1）　口縁部は受け口状で、端部はわずかに内傾する面をもつ。口縁部内側の稜は鋭い。内外面ナデ調整。硬質だがいぶし具合が甘く、ほとんどの部分が土師質である。外面煤付着。口径は32.7cm。

土師器鍋（2）　器壁は薄く、口縁部は直線的に開く。口縁部はヨコ方向のハケメ、体部は内面ヨコ方向のハケメ、外面タテ方向のハケメ。外面煤付着。口径は33.4cm

紡錘車（3）　土師器甕（壷）体部片を転用する。両面穿孔。表裏とも器面剥離著しい。直径5.0cm、厚さ0.4～0.6cm、重さ11.4g。

2号土壙　**土師器皿**（4・5・6）　口径の大きいもの（4）、小さいもの（5・6）がある。4は口縁部がわずかに内湾し、端部は若干の面をなす。底部内面中央は強いナデで凹む。口縁部のみヨコナデ。底部外面は未調整に近く、粘土紐痕跡を残す。底部外面にヘラを差し込んだような段差がみられるが、砂粒の動きは観察されないため、底部切り離しの痕跡ではないと考える。口縁部に油煙が残る。5はてづくね成形で、口縁部は一段のヨコナデ。口縁端部外面を面取りし、断面三角形になる。6は底部外面回転糸切り。小片のため断言は難しいが、外面に赤色顔料が塗彩されている可能性がある。口径は4が13.0cm、5が7.4cm。遺存度は4が1/3、5は完存、6は1/4。4は明褐色で5・6は淡褐白色。

土師器鍋（7・8・9）　口縁部は外へ直線的に開き、底部はやや丸みをもつ。内外面ともハケメ調整。7は器高が高く、体部と底部の境があいまいなため甕とするべきかもしれないが、調整・焼成などが他と同じため鍋として一括した。いずれも外面煤の付着が著しい。口径は7が33.2cm、8が33.6cm、9が33.8cm。器高は8が14.5cm。

3号土壙　**土師器坏**(10・11・12)　赤色顔料を塗彩し底部周辺部のみヘラ切りの10・11と、底部回転糸切りの12がある。10は口縁部のナデが螺旋状である。11の底部外面に「東」の墨書がある。口径は10が11.9cm、11が12.0cm、器高は10が4.5cm、11は4.0cm。12は遺存度1/4。10・12は上層、11は下層の出土である。

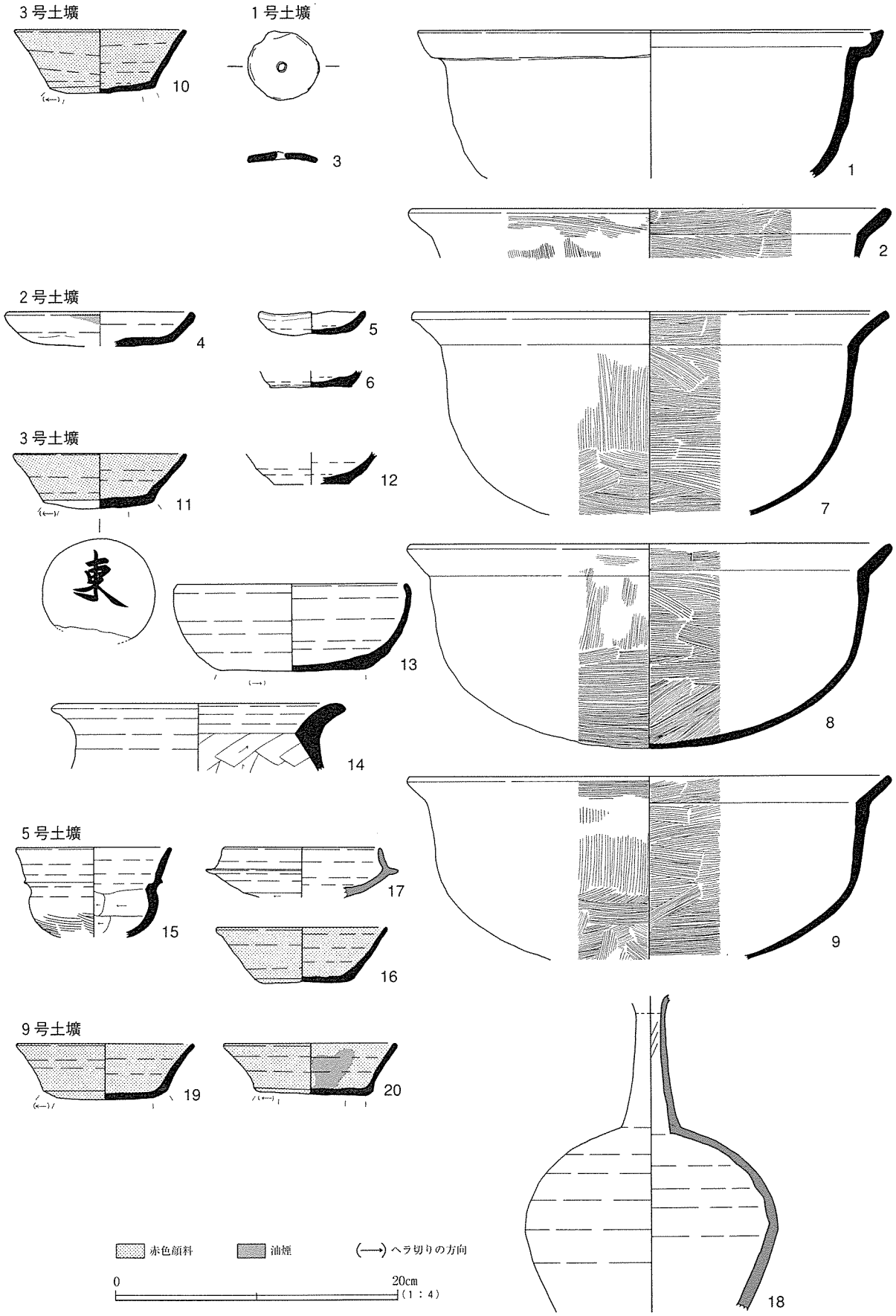
土師器埦（13）　広く平坦な底部から体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸い。底部外面はヘラ切り後ナデ。体部破片が少なく、図上復元である。口径16.1cm、底径10.3cm、器高6.2cm。下層出土。

土師器甕（14）　口縁部は短く外反する。口縁部ヨコナデ、体部内面はヘラケズリ。外面煤付着。口径19.3cm。

5号土壙　**土師器小型丸底壷**（15）　口径が最大胴径を上回る。口縁部は直線的にのびる二重口縁で、体部は浅い。口縁部内外面ヨコナデ、体部から底部外面はヨコ方向のハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリ。口径10.6cm、最大胴径9.2cm。

土師器坏（16）　底部は平らで、口縁部は直線的に外へ開く。口縁部ヨコナデ。底部外面は周辺部のみヘラ切り後ナデ。底部内面に焼成後格子状の線刻を施す。内外面赤色顔料塗彩。口径12.0cm、器高4.0cm。

須恵器坏（17）　受け部は水平で、立ち上がりは内傾するが、比較的高い。端部は丸くおさめる。底部外面は回


3号土壙
1号土壙
10
3
1
2
2号土壙
4
5
6
7
3号土壙
11
12
東
13
14
8
5号土壙
15
17
16
9
9号土壙
19
20
18
赤色顔料
油煙
ヘラ切りの方向
0
20cm
(1：4)

第13図　出土遺物図1

転ヘラケズリ。口径は11.0cm。遺存度1/5。

須恵器水瓶（18） 最大胴径位が低く、肩の張らない胴部で、頸部はわずかに内傾しながらのびる。頸部内面には絞り目がある。最大胴径17.8cm。

9号土壙 **土師器坏**（19・20） 底部は平坦で口縁部は外反気味に外へ開く。底部外面は周辺部ヘラ切り後ナデ。赤色顔料塗彩。19は内面に油煙残る。口径は19が12.2cm、20は12.0cm。器高は19が4.0cm、20が3.7cm。

6号溝 **土師器高台付坏**（21・22） 21は貼付けの、22は中実の柱状高台気味の高台をもつ。21は底部回転糸切り後外へ開く高台を付ける。22の体部は内湾し口縁部はわずかに外反する。高台底部は回転糸切り。21は高台径6.0cm。22は口径10.2cm、高台径5.0cm、器高4.6cm。21・22とも淡褐白色。

9号溝 **土師器高台付坏**（23） 底端部内側に低い高台を貼付ける。高台は厚く、端部は丸みをもつ。高台の内側を除き赤色顔料塗彩。高台径7.6cm。

遺構外 図化したもののうち、25がC地区出土で、その他はすべてA地区出土である。

土師器皿（24・25） 24は平坦な底部から口縁部が短く立ち上がる。底部内面は中央が盛り上がる。底部外面は回転ヘラ切り。25は浅く開く皿に、比較的高く外へ開く高台が付く。口縁部ロクロナデ。皿底部外面を回転糸切りした後高台を貼り付ける。口径は24が7.7cm、25が8.9cm、器高は24が1.6cm、25が2.9cm。24の底径は5.8cm。25の高台径は5.7cm。

土師器坏（26） 口縁部は短く外反し、端部は丸い。器壁はやや厚い。外面に「金□」の墨書あり。内外面赤色顔料塗彩。

土師器鉢（27） 台部は外へ開き、体部は直線的に外上方へのびる。口縁端部は面をなす。体部外面はタテ方向の、内面はヨコ方向からナナメ方向のハケメ。内外ではハケメ原体が異なる。胎土は粗く、1㎜大の砂粒を多量に含む。外面口縁部以下体部1/2の範囲が非常に器面荒れている。遺存度1/8、口径は12cmに復元される。

紡錘車（28） 弥生土器甕（壺）体部を転用。外面には波状文を施す。内面はハケメ。両面穿孔。直径約5cm、重量17.7g。一部欠損する。

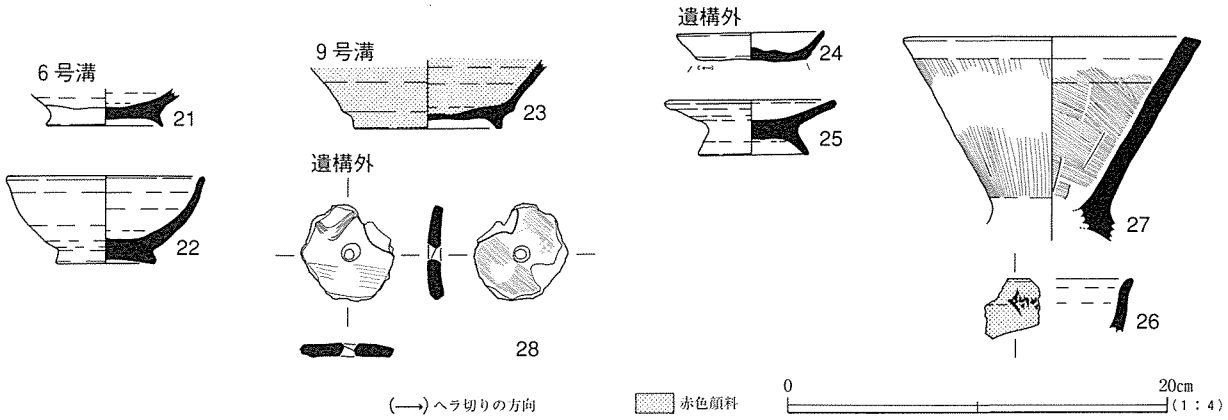
銅製品（29） 薄い板状で、先端は尖る。もう一端はバチ状に開く。側面は両側から面取りが施される。「し」の字状に曲がっている。長さ12.5cm、最大幅1.1cm、重量7.0g。

瓦 丸瓦は67片15.6kg、平瓦は240片47.2kg出土している。このうちには軒瓦も含まれ、型式の判別する物は全て伯耆国分寺出土[註1)]のものと同型である。内訳は軒丸瓦が615型式3点、620型式2点、632型式1点、645型式1点、軒平瓦が651型式1点、665型式2点、675型式3点、685型式1点、690型式1点である。

塼・磚 塼と考えられる厚手の破片が5点出土した。全形が分かるものはないが、厚さが分かるものでは6.0cmと8.6cmのものがある。また磚と考えられる平坦な加工面をもつ石が3点出土した。塼・磚は遺存する面に炭化物が付着した痕跡がある。

図化した遺物のうち、時期が最も古いのは紡錘車28で、内面ハケメ調整のため弥生時代中期と考えられる。次は5号土壙出土の小型丸底壺15・須恵器坏17の古墳時代の遺物である。15はくずれのない二重口縁で、ヘラケズリの位置も高く、古墳時代前期と考えられる。17は底部が浅いものの立ち上がりは比較的高く古墳時代後期（陰田4期[註2)]、TK43[註3)]）と考えられる。

赤色塗彩のある土師器坏10・11・16・19・20・23は、底径が小さく、口縁部は大きく外に開く。底部外面はヘラ切り後の調整が雑で、伯耆国庁編年[註4)]第2段階SD33からSK05に比定される。土師器埦13はあまり出土例のない器形だが、底部外面はヘラ切り後ナデ調整で平らなもののヘラ切りの痕跡を残すため、国庁編年第2段階のもの



第14図　出土遺物図2

であると考えられる。

6号溝出土の土師器坏22は底部が柱状高台気味に発達するもので、11～12世紀と考えられる。2号土壙のてづくね皿4・5、糸切り皿6、土師器鍋7・8・9は土壙廃絶後の一括廃棄遺物と考えられる。てづくね皿5は底部と口縁部の境が明瞭ではない。土師器鍋は底部が丸く、土壙内から出土したのは土師器鍋のみで、瓦器鍋を含まないことなどから13世紀と考えられる。1号土壙の鍋1は受け口状の口縁部の屈曲が明瞭で端部も鋭く、13・14世紀のものと考えられる。

註

1）佐藤　興治他『伯耆国分寺跡発掘調査報告書Ⅰ』倉吉市教育委員会　1971

2）萩本　勝他「須恵器について」『陰田』米子市教育委員会　1984

3）田辺　昭三『須恵器大成』角川書店　1981

4）巽　淳一郎他『伯耆国庁跡発掘調査概報（5・6次)』倉吉市教育委員会　1979

参考文献

八峠　興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎的研究Ⅷ』日本中世土器研究会編　1998

Ⅳ　まとめ

発掘調査によって土壙9基、溝10条などを確認し、弥生時代から中世に至る多種の遺物が出土した。各遺構の時期を中心に整理し、まとめとしたい。

弥生時代　確実に弥生時代といえる遺構は確認していないが、紡錘車28をはじめ包含層出土遺物の中には一定量の弥生時代中期の遺物があり、周辺には遺構が存在すると考えられる。

古墳時代　1号箱式石棺墓は棺の内法が幅26cmと小型のものである。西側側壁石の下に石がかませてあるなど通常みられる石棺墓とはややつくり方が異なる点もある。1号箱式石棺墓は周辺の攪乱により確実ではないが、2.0m西にある1号段状遺構の段下につくられていると考えることができ、1号段状遺構を古墳周溝肩とする古墳の周溝内埋葬施設である可能性が高い。1号段状遺構は他遺構に切られ、確認した長さが短いが、ほぼ直線的に延びているため、方墳の可能性がある。時期は、決め手となる出土遺物を欠くが、墳丘もしくは墳丘下となるⅤ層（第4図断面図参照）上層から6世紀代の土師器が出土しておりそれ以降と考えるが、周辺からは古墳時代前期の遺物もわずかながら出土しており、検討を要する。1号溝はⅤ層の下から検出したもので、古墳築造以前の遺構である。

歴史時代以降　9世紀後半の確実な遺構としては9号土壙がある。3号土壙・5号土壙は他時期の遺物も出土したが、出土層位などから混入と考えられ、遺構の時期は同じく9世紀後半と考えられる。7号土壙は1号箱式石棺南端を壊している。その際に流れ込んだと考えられる石棺内の流入土から平安時代（9世紀代）の土師器片が出土している。9号・10号溝はほぼ並行する溝で、図化した23のほか糸切り底の土師器坏も含み、9世紀後半以降ある程度の存続期間があったものと考えられる。

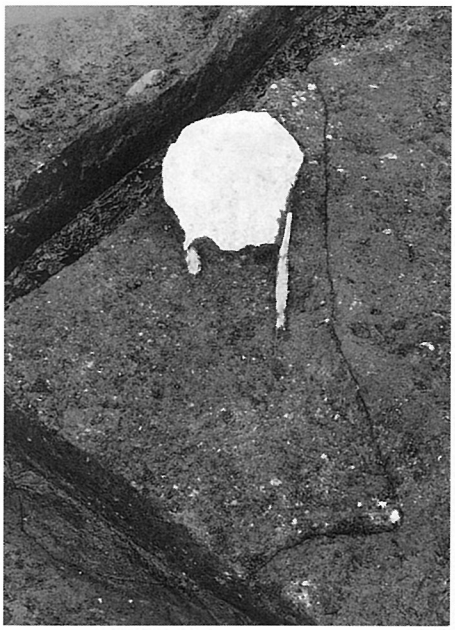
当遺跡は国分寺跡の南東150m、法華寺畑遺跡の南300m、山陰道の可能性がある河原毛田遺跡から北に150mと奈良・平安時代の重要な遺跡に囲まれ、国府に関連する遺構が所在してもおかしくない位置である。しかし、顕著な遺構は確認していない。正方位をとる遺構は南北に延びる2号溝、東西に延びる8号溝があり、何らかの区画を示す可能性はあるが、出土遺物もなく、また周辺の遺跡からの距離も完数ではない。今回の調査地の南東端で国府川の氾濫により堆積したと考えられる黒灰色砂（Ⅳ層）を確認した。砂層の下層には9世紀後半の遺物を多く含み、当遺跡は平安時代には安全で、安定した土地ではなかったことを示す。同様に平野地に立地する河原毛田遺跡は丘陵上とほぼ同様の層位で、全く立地条件が異なっている。国府川の流路、国庁・国分寺・法華寺畑遺跡のある丘陵に東から西へ入り込む小規模な谷などによって、国府域の平野地の旧地形は均一なものではないことが明らかになった。

11世紀代には6号溝が、13・14世紀には2号土壙・1号土壙がつくられる。2号・1号土壙は井戸の可能性があり、今回の調査地が集落の縁辺部であることを示す。4号土壙からも薄手で内外面ハケメ調整の著しい土師器鍋破片が出土しており、12・13世紀と考えられる。いずれも今回の調査区南側で確認した遺構である。狭い調査範囲内ではあるが、時期を経るにしたがい遺構が溝から井戸へと変わり、国府川の氾濫以降ある程度の時間をおいて集落へと変化していった様子がうかがわれる。

調査によって明らかになった点を時代順に述べた。時期・性格の決め手を欠く溝などの遺構もあり、また、天暦2（948）年に焼失した以後の伯耆国分寺跡と中世の集落との関係、周辺の水田に痕跡を残す条里制の具体的な様相など残された問題は多いが、今後の調査・研究の進展に期待したい。

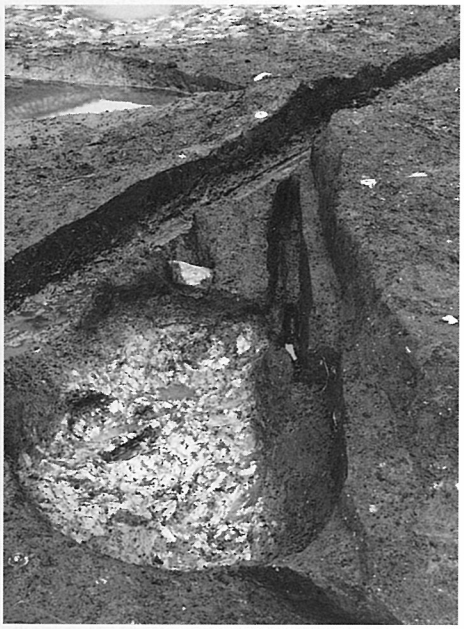
A地区下層（南西から）

A地区上層（東から）



1号箱式石棺墓　蓋石検出状況（南から）

棺床面（南から）



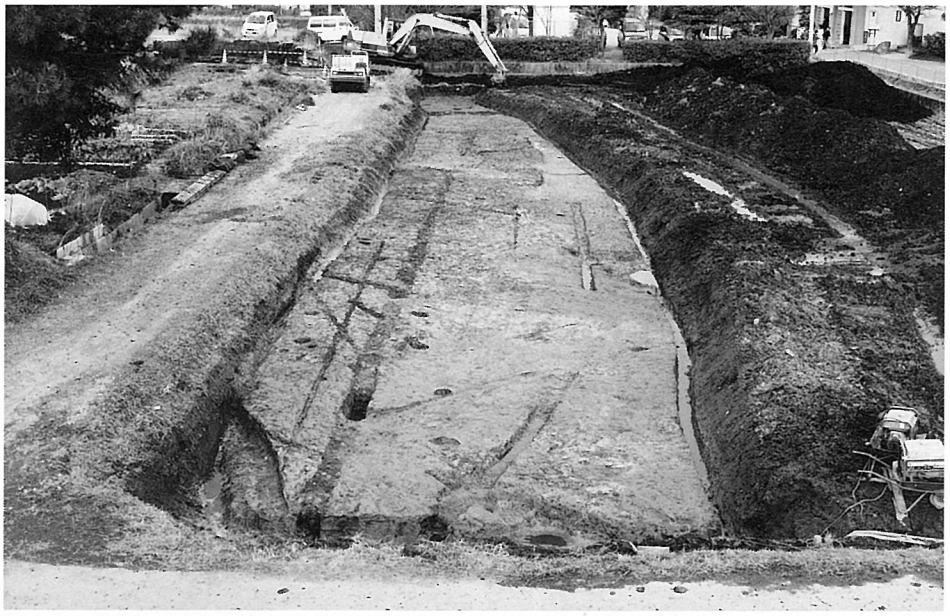
完掘状況（南から）

1号土壙（東から）

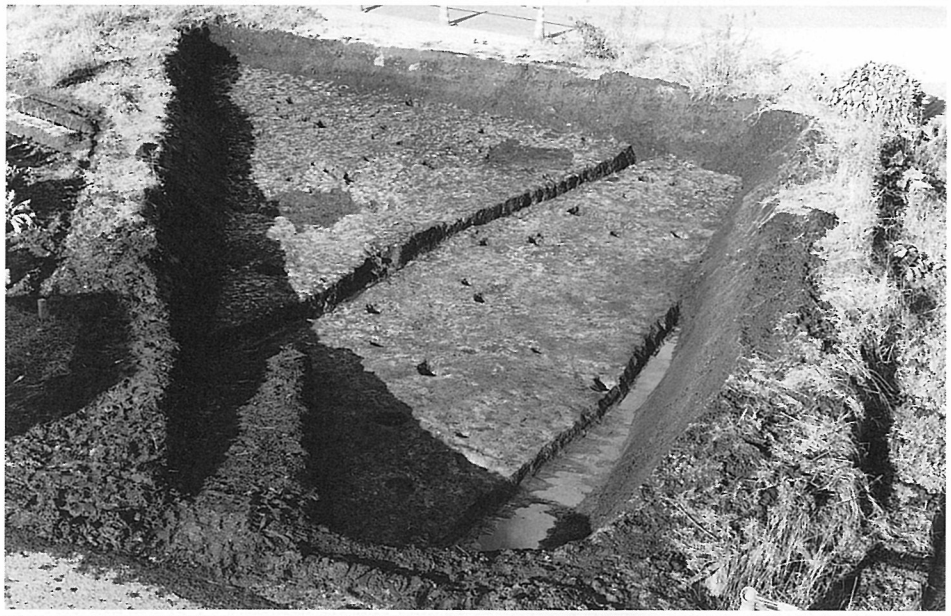
2号土壙（西から）

2号土壙断面（西から）

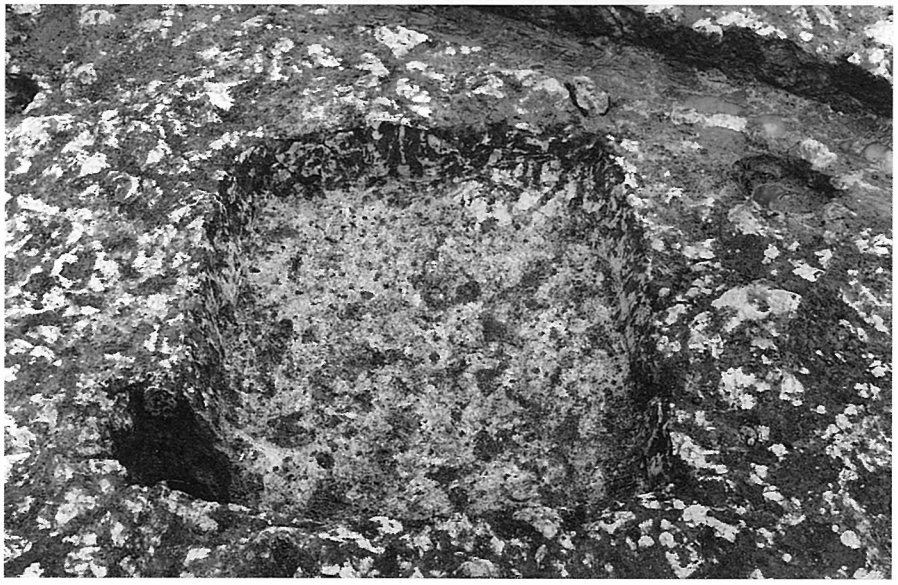
図版 2



B 地区全景（南西から）



C 地区全景（南から）



9 号土壙（西から）

1

5

24

11
（1：2）

7

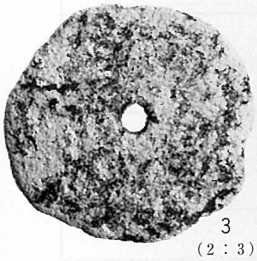
16

10

8

20

13



3
（2：3）

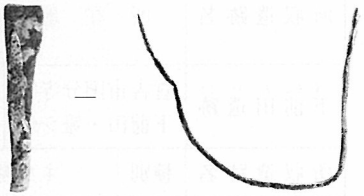
28
（2：3）

25

22

27
（1：2）

26
（1：1）



29
（1：2）

報告書抄録

書　　名	下前田遺跡発掘調査報告書
副　書　名	——
巻　　次	——
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第118集
編著者名	岡平拓也
編集機関	倉吉市教育委員会
所　在　地	〒682-8611 鳥取県倉吉市葵町722番地　TEL 0858-22-4419
発行年月日	西暦2003年3月20日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下前田遺跡	倉吉市国分寺字下前田・雑シ畑	31203：6NKS	35°25′45″	133°25′39″	20001112～20010109	850㎡	市道改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
下前田遺跡	集落	古墳：箱式石棺墓1基 古墳～中世：溝10条 土壙9基	瓦、弥生土器、土師器、墨書土器、須恵器、陶磁器、鞴羽口、塼、不明銅製品、砥石	13世紀代の井戸と考えられる土壙を検出。中世集落の縁辺部と考えられる。

下前田遺跡発掘調査報告書

平成15年３月20日　印刷
平成15年３月20日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　勝美印刷株式会社